■ウラジオストクはロシアのアジアへのゲートウェー

ERINA理事長　吉田進

第１回ヨーロッパ・アジア太平洋会議

2003年９月24－26日にウラジオストクで第１回ヨーロッパ・アジア太平洋会議が開かれた。この会議は、コプィロフ・ウラジオストク市長の提唱により、世界ペンクラブ、DAAAM協会などの協賛を得て開催されたものである。ロシア国内では、国立経済・サービス大学、国立極東総合大学、国立海運大学などが後援した。

参加国はカナダ、中国、インド、アメリカ、メキシコ、日本、韓国、北朝鮮である。会議の出席者は、主として学者、自治体と団体の代表だった。ロシア連邦はこの会議を重要視し、セレズニョフ下院議長、グーセフ・ロシアエンジニアリング・アカデミー総裁、ペトロフ全ロシア商工会議所副会頭等が参加した。

昨年、APEC関連会議と展示会がウラジオストクで開かれた。ロシアは、いまやアジアを重視し、ウラジオストクを拠点にアジア太平洋諸国に対する経済外交を展開しようとしている。その背景には、太平洋パイプラインの敷設や北朝鮮問題解決のための６カ国会議開催など、北東アジアの大きな変化とWTOへの参加が日程に上がってきたことがあげられる。会議の目的は、ヨーロッパ諸国とアジア太平洋諸国の関係を発展させる過程においてウラジオストクの役割を高めることにあった。会議のテーマは、グローバル化：経済、文化、技術、自然の相互作用である。

この会議と並行して、第９回環日本海10都市市長会議が開かれ、第１日目の総会は両会議合同で行われた。そこには、島根県などの代表の姿が見られた。

その後、会議は、経済、環境、自然、文化、技術、グローバル化と地域開発などの分科会に移った。経済だけでも、エネルギー、地域の安全、インフラ、通信とIT、北東アジアにおける国際協力、ビシネス、貿易、教育のモデル等をテーマに３セッションが持たれ、かなり広範なテーマが取り上げられた。

ここで、ERINAとしての活躍に触れておく。筆者は、24日冒頭の総合セッションで、「日ロ経済関係の展望」と題する講演を行った。この講演は、特にロシアと中国の関係者の注目を浴び、中国社会科学院ロシア・中東欧研究所の副所長からは懇談の機会を求められた。24日のエネルギーセッションでは、「日ロ間のエネルギー分野の協力：サハリンプロジェクトと太平洋パイプライン」について発言を行った。この発言は、特に韓国と北朝鮮の出席者の関心を呼んだ。25日のWTOのセッションでは、分科会議長

をつとめ、総括を行った。このセッションには、日本領事館からも出席されていた。

会議の終わりに、成果を要領良くまとめ、今後、偶数の年にはヨーロッパで、奇数の年にはアジアで会議を開くことを決めた宣言を採択した。全体としては、グローバル化が進行する中での各国の協力のあり方が熱心に討議されたが、テーマの幅が広く、ポイントを絞り込むことは難しかった。また、ほとんどが報告だけで、討議をする時間がなかった。とはいえ、全体の組織はうまく運用され、会議としては成功であったと言えるのではなかろうか。

ウラジオストク市長との会談

この会議のあと、コプィロフ・ウラジオストク市長との小人数の会談があった。この会談には、カナダ（世界ペンクラブ事務局長）、アメリカ、インド（アジア連盟協会発起人）、韓国、マルタ（地中海）の代表と共に私も招待された。

市長は、まず今回の会議に参加したことに対する謝意を述べた。そして「私にとって、ウラジオストクのアジアにおける地位が高まることが最大の喜びだ。ウラジオストクは12年前まで、軍港がある閉鎖された街で、私の小さいころには、外国人の姿さえ見かけることはなかった。ウラジオストクは世界から切り離され、グローバル化が遅れた都市となった。今それを必死に取り返そうとしている。昨年は、APECに関連する展示会を行った。私はこの土地をヨーロッパとアジアの接点にしたい。一昨日、バングラデシュ大使が来られたが、『バングラデシュはモスクワよりもウラジオストクとの関係をまず強化すべきだ。わが国とロシアとの関係はウラジオストクから始まるべきだ』と述べていた。私はウラジオストク市をロシアの東のゲートウェーと位置付け、貿易・投資にとってより開放的な環境を整えるつもりだ」と強調した。

引き続いて、日常の仕事を紹介し、「市長の仕事には、貿易・投資の促進も含まれている。最近、新しい建物用の大理石の輸入を決めたが、その時には、各国のサンプルを持ちこみ、関係者に見てもらった」と発言しながら、テーブルの下からその時のカット・サンプルを取りだし、出席者にまわした。なかなか気さくな人で手回しがよい。インドのサンプルを手に持ちながら、彼はインドの代表に向かって、「結果としてインドの大理石は価格的に中国に負けたが、ダイヤモンドの加工では、インドの会社に許可を出した」と話した。

私には、「新潟の長谷川元市長とは、古い友人である」と述べ、書棚に飾ってあった一緒に写した写真を見せてくれた。

市長は、毎週木曜日の午後３時には、市民から直接かかった電話に出て回答をするが、今日がその日で、この会合のあとにそのスケジュールが入っていると言っていた。また時間の合間を見て論文も書いていると、著書「グローバル化と地域から見た社会・経済の移行」、「地方の自治管理システムの発展傾向と潜在力」、「自由経済地域」を贈呈してくれた。かなり開放的で、活動的な市長で、好感が持てた。

ゴルチャコフ副知事との会談

翌日にゴルチャコフ副知事と会見した。副知事は、「モスクワに出張していたが、昨日帰ってきた。沿海地域の発展、特に輸送システムに関する会議があったので出席した」と前置きし、いきなり「日本の会社との話し合いは難しい」と切りだした。「なぜですか」と聞くと、「先日S社の代表がダリキン知事に会いたいというので話し合いのテーマを事前に出してほしいと要請した。それがなかなか届かないので、州政府にあったS社に関する資料をマクシーフ外国投資委員長がまとめあげた。

さて、その日になり、S社の代表団がきた。しかし会議が始まっても天候や経済一般の話で一向に中心テーマに入らない。知事が緊急の電話で席を一時的に外し、戻ってきて話を続けたが、話が核心に至らずに会見は終わってしまった。ところが、そのあとの新聞記者会見でS社の代表は、知事に次のことを話したかったと、重要な内容を２－３点述べた。もしそれを始めに話していたら、会談の内容が深まったのに残念だった」と語った。

このことは、日本人の話し方に今の若いロシア人がついて行けないことを物語っている。結論から話し始めるのが現在にあったスタイルだろう。またこの話は、ダリキン知事とどうつきあうべきかを暗示しており、同知事が若い世代に属していることを物語っている。

そこで私もすぐに話題の核心に入った。まず第１にウラジオストクと日本との貿易を拡大するために、保税倉庫の設立を許可してほしい。日本の電化製品がシベリア鉄道でパリやフィンランドに運ばれ、そこからモスクワの保税倉庫にトラック輸送される。更にその商品が極東で売られている。この事は、そこにかかるコストである１万kmの極東までの鉄道運賃を差し引いても、まだ極東で通関するより安いことを意味する。この方式が続くと、販売後に支払われる税金はウラジオストクには永遠に落ちてこない。まず商品を極東に降ろすことが地方財政の健全化につながるのではないか。最近、新潟の中小企業も極東における貿易

には大きな関心を示し、工具や洋食器のメーカーがウラジオストクやハバロフスクを訪れている。

第２に日本の国際協力銀行（JBIC）が極東の開発に大きな関心を持ち、もしロシア政府が政府保証或いはそれに相当する保証を出すなら融資は可能である。中国政府は西部大開発を特別政策として打ち出している。ロシアもシベリア・極東開発政策を地域発展政策として打ち出し、そこに資金が集まりやすいシステムをつくるべきである。聞くところによると、連邦政府は世銀とEBRDに政府保証を出すが、JBICには出さないそうである。その理由は、JBICが多国間の銀行ではないからだという。このような仕分け方式ではなく、銀行の規模、実績（例えば、ODA）、貸出し条件から再検討すべきではなかろうか。

今回の会議の前日、大会のコーディネーターを勤めたアホーニン氏は、そのラジオ演説の中で、次のことに触れている。「われわれは、数日前に現在手元で管理しているプロジェクトを分析し、その実現に必要な投資金額の推定を行った。それは300億ドルである。しかしこれはウラジオストク全体が必要とする投資の1/5にすぎない」。ウラジオストクだけ取り上げても、資金の需要は大きい。

第３に、10月に琿春で図們江輸送回廊についてのシンポジウムを開く。このルートは、まず日本からザルビノ港まで海路を開設し、中ロ国境を通り、琿春、吉林、長春、そしてモンゴルに入り、最終的にはシベリア鉄道幹線につながる。この整備を各国が智恵を絞って進めようというものだ。ぜひそれに賛同して、参加してもらうことをお願いした。

第４にロシア島の開発を計画されていると聞くが、本格的な計画があるのかと聞いた。

副知事は次のように回答した。「第１の提案は大変良い。関係規定を研究し、ダリキン知事と相談する。第２の問題は、ダリキン知事が11月末にカシヤノフ首相の訪日に随行するので、その時のテーマとすべく努力する。第３については、今朝メールを見て担当者の方にまわした。関係者が参加するよう検討する。これに関連してザルビノ港について申し上げる。モスクワの株主の一部が中国側に『ロシア政府に港の貸与を申請したら、ロシア政府は49年間の港の貸与を許可する』と伝え、中ロ間の見解の相違を招き、今回の混乱が起った。連邦政府に確認したが、港自体を貸与することはありえない。上海でロ中間の政府輸送委員会会議があったが、そこでは中ロ間というより、モスクワの株主とわれわれの間の論争となった。この混乱は終了する。第４のロシア島開発については計画書の印刷がようやく完了した。ホヤホヤの冊子を差し上げる。今日、私のほうからも本件については話題にしたかった。日本の参加を是非お願いしたい」。

また、副知事は、「中国側は、ハンカ湖南部の中国鶏西からロシアへの鉄道を引きたいといっているが、その狙いは何だろう」と質問された。「中国の鶏西地域には良質の石炭が出るので、その輸出用に使いたいのだと思う」と答えておいた。もしこの鉄道ができると、黒龍江省の海への出口が一つ増える。会談は、有意義だった。

ロシア島の開発

ロシア島は、ウラジオストク市の南端にある島で、かつては潜水艦基地だった。昔の地図を見ると、全部が陸地になっているが、実際は大きな入り江があり、島の北部は入り口が狭くて大きな湖のようになっている。外からは見えないので、軍港には最適だ。しかし冷戦構造の崩壊で、潜水艦基地は４－５年前に完全に撤退した。

そこを一大保養基地・商業センターに変えようというのが今回の計画である。島の面積は97.64km^2、長さが18km、幅が13kmである。市の南端から島へ800mの橋を渡すと、街の中心から20分間で島に行ける。海の水は透明で風景は美しく、休養地にとって条件は最高である。そこに高級ホテル、マンションとショッピングモール、子供の遊園地を建設する。シベリア・極東、中国から夏休みに海へ来る旅客は年々増えている。所要資金は、8億5,000万ドルである。

ロシアへの入り口として、日本が官民一体で一定の投資をすることによって、この島に日本都市の一角を作ることができたら、日本の象徴として、大きなPRができるだろう。

ロシアの経済が上向きになりだしてから4年目になった。ロシアの極東では、投資が始まろうとしている。この現実をそのままとらえたい。